

田嶋悦子

《Cornucopia 08-Y2》



鮮

やかな黄色が鑑賞する者の目を惹きつけます。「豊穡の角」を意味する《Cornucopia》と題された本作は、陶とガラスで構成された陶芸作品です。浮力のある軽さを感じさせる外見ですが、ずっしりと重量があり、三点のわずかな接地面により絶妙なバランスで静止しています。

陶とガラスできているのに、なぜ陶芸なの？と思われる方がいるかもしれませんが、それが本作の見どころのひとつでもあります。陶芸作品の多くは、土の層の表面に釉薬というガラス質の層を形成することが多いのですが、作者は陶芸を「土とガラスの立体造形」と再解釈をして、本作では表面を覆うガラス質の釉薬をはぎとり、ガラスの立体パーツとして置き換えています。

陶の部分は、粘土を板状にして形づくるタタラという技法によるもの。型紙にあわせていくつもの陶板をつくり、それを貼りあわせて成形しています。ガラス部分は、石膏型にガラス粒を詰めて窯で焼成する鑄造技法を取り入れています。別々に制作された中空構造で軽量の陶とガラス塊のふたつのパーツが組み合わされ、中空と塊、不透明と透明、有色と無色など、相反する複数の要素がお互いを補完しあっていることになり、内から外へと伸びゆくようなバイオモルフィックな姿があらわれます。

作者の田嶋悦子は、一九五九年大阪府生まれ。大阪芸術大学工芸学科陶芸専攻に入学して初めて土に触れ、陶を素材とする制作に向きあいました。八〇年代はおしりやおっぱいといった女性的なモチーフや極彩色の釉薬を施した大型のインスタレーション作品で注目されますが、九〇年代に入ると、それまでの釉薬を取り払いマットな化粧土による白一色の焼締めへと作風が大きく変化します。九三年からはガラス制作を手がけ始め、代表作である陶とガラスを組み合わせた《Cornucopia》シリーズが展開されていきます。

作風の変化は、ある時、自身の作品が撮影された写真の中に見えない空気感が捉えられているのを見て、作品とそれを取り囲む空間との境界が気になったことから始まったといえます。以降、田嶋にとって「空間」が制作の重要なテーマのひとつとなっています。

当館には既に《Cornucopia》シリーズの作品が二点収蔵されていますが、いずれも白化粧土の陶と色ガラスによるものです。今回寄贈いただいたのは、黄色のボディに無色のガラスを組み合わせた作品。白一色の陶制作を続けていた中で色を施したのは、作品への視線をガラスではなくより陶に向けたいと考えたからだとそうです。

(工芸課客員研究員 内藤裕子)

田嶋悦子(1959-)
《Cornucopia 08-Y2》

2008年
陶器、ガラス
高さ100.0、幅50.0、奥行53.0cm
平成30年度寄贈
撮影：斎城卓